

レジャー行動モデルの行動計量学的分析

○土屋 薫（青森大学）、澁谷泰秀（青森大学）

I. はじめに

1970年代の未来論ブームの中で指摘された「社会問題としてのレジャー」という視点も、長期的な傾向としての平均寿命の伸びや労働時間短縮といった事態を考慮に入れると、日本社会においては現実的な意味合いを帯びてくる。ましてや、国民の意識が「衣食住」生活よりも「レジャー・余暇生活」を大切にしたい、あるいは「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」に重きをおいて生活していきたい、という方向へシフトしているとすれば、現代社会におけるレジャーというテーマの重要性は、疑うべくもない。

つまり、デュマズディエの議論を持ち出すべくもなく、レジャーは社会政策の柱の一つとしてその姿を現わした訳である。

それでは、レジャーはどのような視点から取り扱われるべきものなのか。

語源を遡ってみると、レジャーとは「自由な心の状態で、学問、自由学芸、文化を楽しむ、その人がその人本来に向かうこと、完成に向かうこと、全体に向かうこと」だと言う（松田、1988）。つまり、レジャーこそが人生の目的である、ということになる。

ところが、その人生の目的を「社会政策」として扱う、と聞くと、やや奇異な印象を受ける。ここに、レジャーというテーマの持つ難しさがある。ただ、レジャーを「善導する」すなわち誘導するものとして扱うのではなく、各個人が人生の目的を達成するべく支援する、あるいはそのような環境整備をすることこそレジャー政策だ、と考えるならば、その支援や整備の方向性に関する議論は重要な意味を持つだろう。

このような視点から、本研究は、個人のレジャーに関する状況を捉えるいくつかのアセスメント・ツールの関係と、その政策へのフィードバックの可能性について明らかにすることを目的とする。言い換えれば、本研究の目的は、レジャー研究に関する社会心理学的アプローチと政策志向アプローチの融合可能性を探るものである。

この目的を達成するために本研究では下記の具体的なゴールを設定した。

1. 個々のレジャー・アセスメント・ツールの尺度の行動計量学的評価
2. 総項目数が100項目を大きく上回らないように複数のレジャー・アセスメント・ツールを一つの調査票にまとめる
3. レジャー行動を多角的に説明できる一般化モデルの構築

II. 研究の方法

(1) レジャー概念の規定

通例レジャーは、時間概念や活動概念、あるいは規範的な価値観に関わる心の状態、という3つの側面から捉えられる（新津、1977）。これらの視点で議論のわかれることは周知の通りだが、社会政策という視点からレジャーを考えると、レジャーの機能に注目したデュマズディエの議論は注目に値する（Dumazedier, 1980）。すなわちデュマズディエは、レジャーの機能を「休息・休養」「娯楽・気晴らし」「自己開発」という3つの視点から整理した訳だが、これと語源から見たレジャーの意味を照らし合わせると、「個人が置かれたストレス状況から自由になること」こそレジャーである、と捉えることが出来るだろう。

(2) アセスメント・ツールの選択

LoeschとWheelerによれば、レジャー・アセスメント・ツールは、以下の6つに分類され（1982：LEISURE ATTITUDES, LEISURE VALUES, LEISURE STATES, LEISURE BEHAVIOR, LEISURE SATISFACTION, LEISURE INTERESTS）、それぞれいくつもの特徴的なツールを有している。

本研究の目的からすると、1つのツールではなく、複数のツールを使い、多角的に個人のレジャーの状況をつかむことが望ましい。したがって、レジャー・アセスメント・ツールの選択にあたっては、レジャー概念、項目数、妥当性と信頼性、ツール開発の系譜、といったものを考慮に入れる必要がある。

これらの条件を考慮に入れて、本研究では、Leisure Satisfaction Scale (LSS)、Leisure Boredom Scale (LBS)、Leisure Diagnostic Battery (LDB)、Intrinsic Leisure Motivation Scale (ILM)の4つを取り上げた。また前述のように、レジャーと関係が深いと考えられるストレスに関するスケールとして、タイプAスケールをも採用した。

(3) 研究のデザイン

これらのアセスメント・ツールの結果を政策へフィードバックしていくための方法として、上であげた各スケールの結果を因果関係に組み込んだモデルへ構造化するために、ここでは、共分散構造分析を用いた。すなわち本研究は、レジャーに関連すると考えられるアセスメント・ツールを一つの調査票にまとめ、得られたデータの共分散構造について考察するものである。また、レジャーに関連するものとして、上記のツール以外に、本人の余暇歴、レジャー活

動への参加度、本人・友人・両親の社会経済階層といった変数を加え、レジャー行動自体とそれに関連すると考えられる変数関係の説明を試みた。それから、仮説モデルに関しては、余暇歴のレジャー行動に与える影響やレジャー活動における文化的再生産の検証、あるいは余暇活動における満足度或いは不満足度は何によって影響を受けるか、といった視点から構築した。

具体的には、Leisure Satisfaction Scale (24項目)、Leisure Boredom Scale (16項目)、Leisure Diagnostic Battery (10項目)、Intrinsic Leisure Motivation Scale (24項目)、ストレス(タイプA)スケール(11項目)、現在どの様なレジャー活動をしているか(15項目)、余暇歴(9項目)、両親の社会経済階層(6項目)、友人の社会経済階層(3項目)、本人の属性(11項目)といった10種類のツール、総計129項目について調査した。ただ、この研究で用いられたアセスメント・ツールのいくつかは、複数のサブスケールで成り立っており、実際に取り扱われるスケールは20余りとなった。

本研究は、最終的には日本人全体を母集団として展開されるものであるが、第一ステップとして青森県の勤労者を対象に、モデルの妥当性及び各スケールの妥当性・信頼性をテストするためのパイロット調査を行った(ここでの報告はこのパイロット調査の結果に基づいたものである)。サンプルは、都市部(青森市、弘前市、八戸市)、準都市部(五所川原市、黒石市、十和田市)から6つの職種別に約200名を抽出し、郵送法を用いてデータを集めた。

III. 結果

有効回答数は132であった(20歳から59歳までの勤労男女132名)。

また、レジャー・アセスメント・ツールの結果は、以下の通りである。

Leisure Satisfaction Scale は、Psychological, Educational, Social, Relaxation, Physiological, Aesthetic という6つのサブスケールからなるが、各サブスケールの因子分析に関する結果は表1に示した通りである。% of variance は、各サブスケールにおいて分散の何パーセントが第一ファクターで抽出されているかを示しているが、それぞれ約53%から73%の範囲にあり比較的高かった。各サブスケール内における各項目の第一因子に対するローディングは、Psychological Subscaleで[.79, .88, .88, .60]、Educational Subscaleで[.83, .88, .89, .79]、Social Subscaleで[.90, .92, .75, .54]、Relaxation Subscaleで[.88, .94, .86, .51]、Physiological Subscaleで[.85, .88, .86, .80]、Aesthetic Subscaleで[.76, .92, .92, .80]、と高かった。またトータルスコアは、複数項目からなる各サブスケールを1次元にスコアリングし直してから算出されたものである。

表1 Leisure Satisfaction Scale

Subscale	Eigen value for the first Factor	% of Variance	Reliability (Alpha)	Mean	S.D.	Std. Error
Psychological	2.536	63.396	.789	12.22	3.26	.29
Educational	2.897	72.437	.870	13.10	3.38	.30
Social	2.488	62.208	.786	13.17	3.23	.31
Relaxation	2.650	66.247	.799	14.34	3.45	.31
Physiological	2.880	72.011	.870	9.94	3.96	.35
Aesthetic	2.913	72.830	.871	12.65	3.41	.30
Total Score	3.199	53.316	.834	75.45	14.98	1.33

Leisure Boredom Scaleは16項目からなるスケールであるが、因子分析の結果、Eigen valueのトータルが1.00以上の因子は4つあった(表2)。各項目の第一因子に対するローディングは、.60以下が7項目で、最高でも.81(項目10)と高いとは言えなかった。CronbachのAlphaは、.8818で信頼性に問題はないと考えられる。ただこの結果は、Iso-AholaとWeissingerが報告した結果(第一因子のEigen valueが4.803、第2因子では、.817と高いユニディメンショナリティを示した)とは異なるものであった。本研究では、スケール自体のユニディメンショナリティを高めるために、第一因子に対するローディングの高い項目(9項目)を選択し、再度因子分析を行った結果、第一因子に対するEigen valueは.464に、% of Varianceは51.5%に改善された。また9項目での信頼性は、Alphaで.8792と、ほとんど変化がなかった。また、オリジナルスケール(16項目)とショートスケール(9項目)のトータルスコアの単純相関は.955と高かった。

表2 Leisure Boredom Scale

Factor	Eigen value	% of Variance
1	6.128	38.297
2	1.610	10.064
3	1.455	9.091
4	1.034	6.465

Intrinsic Leisure Motivation Scale (24項目) は Self-Determination (6項目), Competence (6項目), Commitment (6項目), Challenge (6項目) という4つのサブスケールからなるが、各サブスケールの平均、標準偏差及び因子分析に関する結果は表3に示した。% of variance は各サブスケールの分散の何パーセントが第一ファクターで抽出されているかを示しているが、それぞれ約34%から51%の範囲にあり、高い値とは言えない。各項目の第一因子に対するローディングは、Self-Determination で [.72, .65, .60, .43, .70, .57]、Competence で [.72, .66, .79, .62, .69, .80]、Commitment で [.77, .73, .73, .47, .18, .36]、Challenge で [.60, .70, .84, .70, .70, .23] と、全体的に高い値とは言えない、特に、CommitmentとSelf-Determinationはユニディメンショナリティの改善が必要であると考えられた。スケール自体のユニディメンショナリティを高めるために、各サブスケールの第一因子に対するローディングの高い項目(3項目)を選択して再度因子分析を行った結果、Eigen value は Self-Determination で 1.750 (58.331%)、Competence で 1.942 (64.749%)、Commitment で 1.816 (60.521%)、Challenge で 1.909 (63.642%) に改善された。また、3項目での信頼性は、Alpha で .635から.723となり、項目数を減少させた事を考慮すると評価できると考えられる。

表3 Intrinsic Leisure Motivation Scale

Subscale	Eigen value for the first Factor	% of Variance	Reliability (Alpha)	Mean	S.D.	Std. Error
Self-determ.	2.296	38.261	.645	19.95	3.85	.35
Competence	3.059	50.978	.804	15.58	4.11	.36
Commitment	2.037	33.957	.566	18.74	3.23	.28
Challenge	2.586	43.094	.707	19.44	3.87	.34

本研究で使用したLeisure Diagnostic Battery (10項目) は、LDB 日本語オリジナル版の研究において試みられた Short Form Version B#である(野村他, 1994)。Short Form Version B#は、Perceived Leisure Competence Scale (3項目)、Perceived Leisure Control Scale (2項目)、Leisure Needs Scale (5項目) の3つのサブスケールからなり、各サブスケールの平均、標準偏差及び因子分析に関する結果は表4に示した通りである。% of variance は各サブスケールの分散の何パーセントが第一ファクターで抽出されているかを示しているが、それぞれ約52%から74%の範囲で、高い値を示している。各項目の第一因子に対するローディングは、Perceived Leisure Competence Scaleで[.84, .84, .75]、Perceived Leisure Control Scaleで[.86, .86]、Leisure Needs Scaleで[.61, .68, .56, .42, .34]、であった。

Leisure Needs Scaleの各項目のローディングは全体として低く、特に項目9及び10は.42、.34と低いため削除した。3項目となった Leisure Needs Scaleの第一因子に対する Eigen value は2.012 (67.080%)、各項目のローディングも .840、.860、.754とユニディメンショナリティに改善が見られた。また、信頼性はAlpha で.7535とほとんど変化がなかった。5項目の総点と3項目の総点の相関は .939で、2項目の削除がスケールの効率に貢献したことを示した。

表4 Leisure Diagnostic Battery

Subscale	Eigen value for the first Factor	% of Variance	Reliability (Alpha)	Mean	S.D.	Std. Error
Competence	1.970	65.683	.736	8.84	2.31	.21
Control	1.486	74.300	.652	5.58	1.59	.14
Needs	2.611	52.228	.762	15.83	3.39	.30

IV. まとめ

アセスメント・ツールの評価はおおむね過去の研究を支持するものとなり、本研究で使用されたスケールにおいては、デモンショナリティ及び信頼性に問題がないと結論された。すべてのスケールにおいて、いくつかの設問を削除し項目の数を減少させたが、オリジナルのスケールと短縮版のスケールの相関は高く、信頼性もほとんど変化がないため、情報のロスが少なく、効率的に調査できる調査票ができたと考えている。今後も調査を行うたびにこのようなプロセスを課し、調査票の改善につとめることが必要であると思われる。

レジャー行動モデルについては、紙面の関係上ここでは詳しく記載できないが、これまで言われてきた Leisure Satisfaction と Leisure Boredom 及び Intrinsic Leisure Motivation 等との関係を支持する結果が得られている。これまでも報告されてきた事ではあるが、Structural Equation Model を用いたモデル解析の難しさは、推計するパラメーターの数とサンプルの自由度との関係上、固定せざるを得ないパラメーターが出てくる為、どのパラメーターをどの様に固定するか、という点にある。本研究においても、慣例にならってエラーを1に固定しているが、それがどの様にモデルの妥当性に影響しているかという点に関しては、今後の研究課題であると考えられる。

なお本研究は、日本私学振興財団による平成9年度私立大学等経常費補助金特別補助事業「特色ある教育研究の推進」の助成を受けて行われたものである。

V. 参考文献

- Beard, J. G. & Ragheb, M. G. 1980, Measuring Leisure Satisfaction. *Journal of Leisure Research*, First Quarter.
- Bollen, K.A., and Long, J.S. 1993, *Testing Structural Equation Models*, Sage Publications
- Bourdieu, P. & Passeron, J. C. 1970, *La Reproduction*. Minuit. 1991 宮島喬訳『再生産』藤原書店
- Dumazedier, J. 1962, *Vers une civilisation du loisir?*. 1980 中島巖『余暇文明へ向かって』東京創元社
- Ellis, Gary D. & Witt, Peter A. 1994, Perceived Freedom in Leisure and Satisfaction : Exploring the Factor Structure of the Perceived Freedom Components of the Leisure Diagnostic Battery, *Leisure Sciences*, Volume 16.
- Hoyle, R.H. 1995, *Structural Equation Modeling*, Sage Publications
- Howe, Christine Z. 1984, Leisure Assessment and Counseling. *Leisure Counseling : Concepts and Applications*, Charles C Thomas.
- Iso-Ahola, Seppo E. & Weissinger, Ellen 1990, Perceptions of Boredom in Leisure : Conceptualization, Reliability and Validity of the Leisure Boredom Scale, *Journal of Leisure Research*, Vol. 22, No. 1.
- 茅野宏明他 1995「余暇生活診断のためのツール開発に関する研究」『自由時間研究17』
- Loesch, L. C. & Wheeler, P. T. 1982, *Principles of Leisure Counseling*. Minneapolis : Educational Media Corp.
- Marcoulides, G.A., and Schumacker, R.E. 1996, *Advanced Structural Equation Modeling: Issues and Techniques*, Lawrence Erlbaum Associates Inc.
- 松田義幸 1988「学習社会に向けてのレジャーの意義 一語源と社会心理調査を手がかりにして一」『筑波大学体育科学系紀要11』
- 新津昇一 1977「余暇論の系譜」松原治郎編『余暇社会学』垣内出版
- 野村一路他 1997「余暇生活設計のためのツール開発に関する研究(II) 一ILM日本語版の信頼性と妥当性に関して一」『自由時間研究21』
- 野村一路他 1994「『余暇生活診断テスト』(LDB)日本語オリジナル版作成に関する研究」『自由時間研究15』
- 嵯峨寿 1996「自己開発的レジャー享受の満足度に及ぼす主体的要因の影響度」『筑波大学体育科学系紀要19』
- 澁谷泰秀、土屋薫 1996「青森県における高校2年生の余暇行動に関する考察 一Lisrelを用いた学際的モデルの解析一」『青森大学研究紀要19巻2号』
- Von Eye, A., and Clogg, C.C. 1994, *Latent Variables Analysis*, Sage Publications
- Weissinger, Ellen & Bandalos, Deborah L. 1995, Development, Reliability and Validity of a Scale to Measure Intrinsic Motivation in Leisure, *Journal of Leisure Research*, Vol.27, No.4.
- Weissinger, E., Caldwell, L., & Bandalos, D. L. 1992, Relation Between Intrinsic Motivation and Boredom in Leisure Time, *Leisure Sciences*, Vol. 14.